八代宏詩集

221
563

特49
56

告條

人道教ハ此書ノ精神ニシテ即チ本教ノ腦髓ナル吉田大義師ガ曾テ或非凡ナル僧ニヨリ受タル所ノ託宣ト自己ノ理想トノ契合スルニ因テ衆謗ヲ排シ不拔ノ志ヲ立テ、開化國人ニ適當スル新教法ヲ組織センガ爲メ全ク俗務ヲ抛チ凡ソ六七年間畫夜之ヲ研究シテ漸ク考定セラレタル「善良圓滿ナル教法」ヲ大聲ク俚耳ニ入ツヤ否モシカ、師ハ之ヲ實行セシメンガ爲メ一身ヲ犧牲ニ供シテ專ラ此事ニ從イ既ニ十數年來群辱ヲ忍ビテ勸誘ヲ務メフルト雖モ未ダ廣ク其實行ヲ見ルニ至ラザルハ國家ノ爲ニ甚ダ遺憾ノ一ナリトス元來我ガ人道教ハ迷信的ノ教法ナラザル故ニ此教旨ニ心服スル者ト雖モ「吾レ先ツ實行シテ愚衆ノ迷夢ヲ破ラン」ト云フ氣慨ナキ者ハ頑冥ナル反抗者アルトキハ折ケテ衆愚ニ從ガハントスルノ傾ムキアリ而シテ其自己ノ怯惰ナルヲ思ワズ利口ガマシク「世間ノ人ガ爲ル樣ニ爲テ居ルガ宜イ」ト云フニ歸シテ其煩ヲ避ントスル無氣力者ノ多キハ即チ本教ノ行ハレ難キ所以ナリ。讀者モ顧ミテ思イ當ルフアルベシ世ニ

氣慨アル者ノ甚ダ少ナキハ是レ本教ノ實行ニ艱ミ所以ナルヲナリ、

然リト雖モ吉田師ノ意思ガ餘リ潔白ニ過ギテ之ヲ廣ク世人ニ知ラシムル所以ノ方便ヲ缺ス能ハザリシヲモ實行ヲ見ザル所以ノ一原因ナリトシテ余輩信者ノ陰ニ遺憾トスル所ナリシガ近來師ガ意思ノ少シク實行ヲ務ムル方面ニ傾ケルヲアルハ實ニ國家ノ爲ニ賀スベキヲナリトス、

此書ハ本教ノ主唱者及ビ同感有志者ノ説話中肝要ナルモノト世人ノ注意ヲ引キ且記憶ニ便ナルモノトヲ集メテ刊行スルモノナルガ故ニ若シ所説ニ疑ヒアル諸君ハ左ニ住所ヲ掲示スル吉田師ニ就テ質問アルベシ、勿論師ハ誠意ノ來訪者ヲ悦ンデ待ルト雖モ徒ラニ抗爭ヲ事トスル暴客ハ拒絶セラルベシ、此旨豫メ他教ノ妄信者ニ告グ、

京都市下京區若宮通(舊名佛具屋町)花屋町南入　吉田大義

編者識

目錄

(一) 宗教ノ改革ヲ要スル大意……五頁
(二) 不都合ナル宗教ノ儀式……九頁
(三) 新教法ノ興ル理由……十五頁
(四) 三大教ニ對スル意見……十七頁
(五) 人道教ノ本領……二十四頁
(六) 宗教ノ功德……二十八頁
(七) 人道教ニ於ル他力ノ加勢ト安心ノ事情……三十三頁

(八) 佛教ノ迷信（附子守歌）……四十一頁
(九) 經文ノ珍談……四十七頁
(十) 人道教實行ノ大法……五十八頁

人道教要話集

(一) 宗教ノ改革ヲ要スル大意

吾輩が、古來の習慣で世上に行はれて居る所の宗教は皆な悪いから改めなければならぬと云ふ譯柄を一々陳べ立たら迚も一朝一夕の談しにできることでないから、其は追々申し述ることとして、今大体を摘で申せば佛教にしても耶蘇教にしても實は世人を迷はせて居るので其の教へにはなつて居らないのである、元來教へと云ふことは世の人々が「つまらないことに」迷て悪いことを爲たりすることのない樣に教へ導びくべき筈のものであるに、然るに却て人を迷はせて無益のことに財貨を費やし、手間日間を費やさせて居るのである、迷て居る人は然は思ふまいが實は何もならぬことに人を迷はし、物を出させて生計を立ると云ふ、善くない一種の營業となつてしまつてるのである、今若し此宗教と云ふ營業が世になかつたならば人智の開明に進むことが何程迅いやら知れやせむ、今の世に何となく人心をして朦朧たらしむるものは斯の宗教の毒氣が世の中に流

動して居るからである、之さへ無かつたならば人智自然の作用は少しも躊躇することなくづん〳〵と道理上に向て進で行くから有益の事業が數倍多く出來て行くのである、

又顧みれば彼僧侶と雖も、もと〳〵學問を務むる習慣のある人だから其方向さへ轉すれば我國の開化を助くべき一原素になることは眼に見えた道理であるが、殊に考へのある若い僧侶抔は大概皆な行く末のことを心配して居るのだが自ら方向を轉して有益の學問をしようと云ふ譯に行かない事情の人が多いので氣の毒なものである、故に今日にあつては公益を思ふ、有志の人々が力を添へて逆樣に此方から濟度して善方針に向けてやらねば、むだな學問に苦んで居る中に漸々人智が開て行くから終には困るべき人となり果て良民の厄介を增すに至ることは判りきつたことなむである、然るに古來の習慣とは云や謂ふものゝ大層なる學校を立て其自ら迷ひながら亦止むことを得ず他を迷はせて生活せにやならぬ僧侶をば今日尙はせんぐり造り出して居るとは何としたことであるか、今の世の中に之ほど不都合千万なものはあるまいじやないか、

今日の我國人は田舍の隅々に至るまで誰も生存上に外國人と云ふ强き競爭者のあることを思ふて、夫の夢の如き空想を抱かないで實驗的の慥かな智能を增す樣に務て、其外國人よりも勝れた考へを出して、外國人よりも勝れた事業を興す樣に心懸けねば、つまる所は此國が立ち行かぬのであると云ふことを能く心得て皆なが大きな志を立る樣にせなけりやならむのであるから苟も人を敎ゆると云ふ責任ある者は必ず此精神を以て國人を導かねばならむのに、片田舍とは云ふものゝ我國の大部分の地に於て其人を迷はせる者が威張て居るとは實に情けない談しである、世の中の事を彼是と考てみると斯の公々然として國家の害毒を成して居る此宗敎商賢ほど不都合なるものは亦とあらせむ、

今日ずつと世上を見渡した所で、他の事業は最早夫れ夫れに改良の方向に進で行く樣になつて居るから、せわ捨て置ても心配するに及ばぬが斯の宗敎ばかりは捨て置けぬのである、そは宗敎其者は到底自ら改良するの望みなきのみならず他の事業の進歩を妨ぐるからである、而して一般僧侶の內情を察するに彼等が自ら改良を圖ること能はざるは恰も幕吏が倒幕を要する維新の事業を企圖すること能はざりしと同樣の事情であるから到底他の打擊を待つの外はないのである、故に道理上から云ても實際上から云ても、つまり局外なる有志

の人々が協力して此宗教の改革を圖るのは止むことを得ざる事實にして而も今日我國の急務中の最大要件であると思ふのである、

扨之を改めて僧侶と寺院とを國家の爲に有益の者としたならば其直接間接に生ずる所の利益は量る可らざる宏大なるものであるが、而かも之が爲に特に大層なる費用を要することもなく只僧侶を勸めて其學問の方向を轉せしむるだけのことなむである、

思ふに此事を行ふは格別むつかしいことで無いと思ふ、なぜと云に稍々學力ある僧侶と雖も漠然佛教には或眞理(哲學的)ありと思ひ居るのみで其の己れが依る所の宗派の教説と以て世を救ふを得可しとは少しも思て居らぬのである實に然は思へぬからでもあるが、從て其法を信じて居る者は丸で無いからである、殊に今の僧侶中には陰に安心の出來る業務に就くべき好機會の來るのを待て居る者が少なくないくらいだもの、故に之を實行するには唯寺院へ齋米を贈れる有力の人々が「決然勸告すると共に其住職なる者の生涯は生活に差支へざる樣の方法を設けて之を保證するとにあるのみ」と云て宜いと余輩は思ふである

此事タルヤ國家ノ開化富强ヲ助成スル所以ノ一大良策ニシテ亦我子孫ノ幸福ヲ永久ニ增進スル所以ノ方法ナレバ假シ少シク面倒ナリトスルモ是レ只一時ノ一ノミ一時ノ奮發ニテ成シ得ル大事業ナレバ各地方有力ノ人々ガ近クハ自家自村ノ爲ニ一時ノ奮發アランヲ余輩ハ國家永遠ノ爲ニ企望スルナリ

若シ勸告ニ應セザル頑僧アラバ斷然辭シテ檀越ヲ去ラル可シ、是レ有志諸君ニ損ナラザルヲ信ジテ間接ニハ大ナル公益トナル可キ義勇奉公的ノ美擧ナレバ、舊習ニ泥ンデ躊躇ス可ラズ、我國人ガ西洋開化國人ニ遅ル先ニ進ミ得ルコトハ唯此宗教ノ改革ヲ斷行スルヨリ外ニアルヲナシ、

(二) 不都合ナル宗教ノ儀式

宗教に關する弊習多しと雖も我邦の佛教信者が義務的に是非執行せねばならぬとして居る所の法事程馬鹿らしきことは他にあるまいと思ふ、勿論迷信者は一種の精神病人であるから論外に置くのであるが、能く事物の道理を知て居る、迷信者ならぬ人にして其馬鹿らし

さことを爲て居るのが余輩は不思議に思ふのである、即ち坊主の云ふことを少しも信じない人、坊主には全く耳を借さない人にして、死者の命日に坊主を招きて御經を上げて貰ふと云ふことゝ葬式の時に坊主を迎へて引導して貰ふと云ふことゝの二つの事を必ず執行することなひである、勿論一般世人には此の二つの事があるに依て寺が入用なのであるが、若し此の二つの事が、ひだなことであると云ふ譯がわかつたならば寺は全く無用物になるのである、

然るに此の二つの事は實にひだなことであるのみならず少し道理を考へてみると恥かしい程馬鹿なことをして居るのである、抑も御經と云ふものは何であるかと云へば則ち是れ御釋迦樣が其時の人々に色々の道理を面白く說て聞かされた談しを後々の人にも知らせる爲に書き殘したものである、決して死だ者の爲に說かれたものでない、活きてる人を敎ゆる爲に說かれたのである、然るに專ら死だ者の爲に其談しを讀みあげて貰ふべきものと定めて居るのは實に馬鹿らしきことではないか「謂はゆる御經なるものは多くは御佛談しの樣なるものであるから、あゝいふ樣な譯のわからぬ調子で讀まぬともてぬのである、其談しは後にするが」、兎に角に死だ者に讀み聞かせる道理がない、然るに一廉理屈を云ふ人々が死だ者の爲に、坊主を招きて事々しく讀經させるのだから馬鹿らしいのである

又引導を授けると云ふことに就ては面白い談しがある、此談し一つで譯がわかつてしまふと思ふが、往昔一休和尙の處へ檀家の者が出て來て云ふに「親父もとうゞう昨夜まいりまして、ございますから、どうぞ御引導を御願ひ申します」と賴みたれば、和尙の云ふに「親父は、もう死でしまつたのか、其は手後れをしたわい、さあ宅へ歸つて親父の天窓を采槌でゞも、一つ打つて見よ若し痛いと云ふたら往てやるわ」と敎へたとの談しであるが、鳥渡聞くと無法千万なことの樣であるが決して然でない、佛敎では斯云ふ說がある、人は死際に一心に思ふて居ることが即ち其者の生れ變つて往く世界を造るのである、例之は佛のことを思ふてる者は、佛の世界に往生すると云ふので、死際の一念が大切じやから死際に迷はない樣に引導して貰ふとか、引導を授けるとか云ふのである、然るに死でしまつてる者を引導せよと云ふのだから、爲方がないので一休和尙が手後れをしたと面白く敎へて奚れたのである、

然るに世間一般の人は現在死でしまつて既に棺に納めてから坊主を招いて引導して貰ふと云ふのであるから是又論に懸らぬ馬鹿な所行である、斯云ふことは皆な往昔の世人が坊主に、子供扱ひをされて居たる餘習に外ならぬのであるから、わかつた人から斷然止めるが宜しいと思ふ、

元來宗教上のことは凡夫に判らぬと云ふ樣な談しが世間一般一つの迷信となつてきたので世の人々が宗教のことに就ては道理か不道理か少しも考てみないものだから、いつまでも斯云ふ馬鹿らしきことを知らず謂らす爲るのである、

扨前陳の通り世人一般に認めて坊主の職務とし坊主自身も己れが主要の職務として居る肝眞要めの事が二つとも全く無要の煩ひであるのみならず謂ゆる大慈大悲なる佛の教へが、哀ひべき喪家の者に「どういふことをさせて居るか」と考へて見ると實に佛の教へか鬼の教へか、判らぬ程不都合なることをさせて居るのであるから序に此事をも陳て置くと思ふ其は葬式の狀情に付ての所感である、

凡そ人の死するには大概病氣の爲に惱ませされ醫藥等の爲に非常の失費を重ねしあげくのことであるゆへ、悲みの外に費用のことに付て憂ひ苦しむ者が多いのであるから、常に養なつて置て貰ふ坊主等は斯の時にこそ大慈大悲の心を起して遺族の憂ひを輕からしむる樣になる樣の口實を設けて種々無要の事をなさしめて少しでも餘分に財貨を取り奪らんとするのである、

元來佛教では佛と法と僧との三つを三寶と稱へて坊主を非常にあがめさせるのか一つの秘訣で、例之ば一人出家すれば九族天に生れる抔と云て坊主を不思議の魔力ある者の樣に思わせて置て、そこで坊主を供養すれば冥途の亡魂が幸福を得ると云ふ妄說を流布せしめしより迷信者が悲しみの餘り困苦中にも死者の爲にと、坊主を集めて饗應すると共に其從者人足をも相伴せしめたる餘習は今尙改ひることなく、死人ある家は必ず多くの人々を集めて、飲食せしめざれば遺骸を葬むることを得さる樣の惡習邪俗となりたるのである、

今其不便なる喪家の者を無要のことに奔走せしめ居る所の狀態を無我無心に觀察してみると、丁度佛教で云ふてる地獄の惡鬼の所爲に能く似て居るのである、

世の人々は見慣て氣が付ぬのか知らむが、不幸の人を一層不幸ならしむるので、是れ宛も病人へ毒を飲せて困しめるのも同樣のことであるから、いかに古來の習慣なりとて氣が付た以上は默て見て居るべきことでないと思ふ、若し純粹自然の人情より云ふときは喪家の者の爲に此方から旨い物でも拵へて名名が持ていてやり、遺族の者を慰めて勢を落さぬ樣に力を添てやることを務てする筈なるに、却て弱身に付込み佛(死人)の爲に供養せよ抔と云て遺族の憂苦を重くするとは實に言語同斷の所行である、

凡そ佛敎として云ふてることと佛敎として爲てることとは丸で逆樣である、不正の商人が善い品だと云て惡い物を攫ませると同樣で坊主は口で轉迷開悟だとか衆生を濟度すだとか云てるばかりで、實は人を迷はし人を困らせることのみを爲てるのである、勿論佛敎はかりではない、他の敎法も大概人を迷はして物を欺き取るのが彼等の目的になつてるのである、

近來道德心の腐敗と云ふことが世間で大分やかましくなつて來た樣だが、道德の根本とも云ふべき宗敎が、斯云樣に不道德の根本と云ふべき有樣では何程さわいだ所が、だめなことであると思ふ、余輩は先づ斯の大間違ひに間違つてる宗敎を改良せねば迚も國人の道德心を喚起することは出來まいと思ふ、此故に余輩は世の明眼者が先づ斯の有害無益の宗敎を放棄して正しき敎法の振興を圖られんことを國家永遠の爲に切望するのである、

(三) 新敎法の興る理由

維新の大改革より四民同等の權利を得て各人の力量次第で何事をも爲し得るの世となりたるは國家の爲に賀すべきことなれども、之に由て上流者は家名を重んずる「自重」の心を失ひ、下流者は分限を守ると謂ひし「自制」の心を亡して德義思想の根幹なる自重或は自制の力を弱くしたる所へ、尙ほ自由と云ふ新觀念の强盛なりしが爲に總ての束縛を脫して上流者の抑壓に逢ふことなく亦同族の制裁を受ることもなく上下共に只法律を楯として我利を爭ふを常とするに至りしことなれば、自然の情勢として德義心を薄弱ならしめざるを得ず之に加ふるに優勝劣敗と云ふ流行語の下に殘忍酷薄なる心情を釀成して、人皆な其行爲の正邪を顧みることなく、只贅澤に暮し得る身分とさへなれば之を才物又は「やりて」抔と稱

し、良心尊敬するには非ざる可けれども、兎に角之を上流者として待遇するの世となりたるのみならず、德義上の問題に對しては只人々の良心に問ふと云ふが如き徒らに個人の薄弱なる感情に訴ふるまでの虛稱となりたり、即ち唯口頭を弄するに止まる調調となりたるが故に顯然たる地位に在る者も多くは無節操にして恥ることを知らざる人となり果るものとす、蓋し良心なる者も之に對する制裁法なき時は恰も出來たる時に返すべしと云ふ無期限の金を借たる人の義務心と同樣にて其人の思案に從ひ重く取る人には至て重しとする理由ありて少しも早く返濟せんことを欲し、輕く取る人には最も輕しとする理由ありて出來なければ返濟するに及ばぬと思ふが如く、各々其隨意に振舞ふことゝなるが故に制裁法なき社會にありては腐敗し易き人情は知らず識らず不實となり惡行となりゆくものにて自然今日の如きあさましき情勢に立至りたるものなりとす是れ畢竟適當なる制裁法の無きに由ると雖も蓋し古來の宗教が人智の進度に後れて人心を支配するを得ざるに至て未だ之に代る可き新教法の興らざるに歸するのみ、

夫れ教法なるものは善事を勸むるに止まらず必ず善事を爲さしむるの方法あるを要するなり、今や古來の教法は愚人を迷はすに止まりて其善事を爲さしむるの方法なる即ち制裁力たりし前生の業報又は神罰或は天罰と云ふことの妄說なることを知りたる國民に對しては何等の勢力もなき徒法となりたるのみならず從て其勸むる所の事柄に於ても條理に戻りたることの多きが故に却て人心を腐亂せしむるの媒介物となるに至りしなり、茲に於てか新教法の興るありて痴情の競爭に惱める人心を安堵せしめざる可らず、是れ天數なり人道教の興るや斯の理に外ならざるのみ、

(四) 三大教に對する意見

古來世に行はれて勢力ある教法少なからずと雖も通觀すれば佛教儒教及び耶蘇教を以て各特殊の光彩を發輝する所の最も顯著なるものとす、勿論他教にあつても皆な夫々に多少の異彩を存すと雖も、畢竟右三大教中に包容する所の趣味と大差あることなし、而して其三大教祖なる釋迦と謂ひ孔子と謂ひ耶蘇と謂ひ孰れも大智大善の人なれば、勿論敬服感佩すべき多くの教語を傳へられたりと雖も、惜い哉太古未開の世に出られし人なるか故に今日

より其所説を見れば空想迷信等の弊害ありと認むる而も緊要なる條件のあるか故に就れも一途に信奉し難きものとす、而して三教各々長短ありて之を審査取捨するの必要あるなり彼心酔信者輩は敢て曲解辨護して認ゆることありと雖も、若し公平無私に觀察すれば何人と雖も、首肯せざるを得ざる是非明白なる道理あるを認むべきなり、左に其大要を陳述せん、

佛教は欲情を消滅せしめんとする精神が始終教説に追隨して須臾も離れることなく、幾んど斯の精神が土臺となりて其上に因果の説や無常の談が運動操作する者の如く其意たるや人をして善ならしむるには限りなき慾念を離れしむるにありとして專ら之を務むる者と見ゆるなり、且つ佛教最後の目的なる解脱すると云ふことも要するに現世の欲念を離るゝ外ならざるが如し、其教への主義は外界の欲を去らしむる爲に内界(心中)に一種の觀念を作らしむるにあり、即ち世人が消極的の道義心を起して名利の競爭に困憊することなきを期するものにて、平たく云へば世の人々が娑婆世界の榮華は朝露の玉に等しき淺ましいものと「あきらめて」其利欲の競爭に咆哮する修羅道より脱出することを期するなり、之を約言すれば空しく主觀的の樂みを作つて客觀的の快樂を忘るゝにあるのみ之を佛教の精神とす

其教説に曰く「有(存在)なる觀念に執著するが故に、貪欲愚痴の人となる者にて有の無常(空)なることを知らざるは無明と云ふ妄想に外ならず」と開悟するが其要領なれば畢竟欲念を去ることを務めしむるものに外ならず、是れ亦名僧なる者の實蹟に徵して証明することを得へきなり、果して然らば生物は競爭力の强き者が榮ゆと云ふ學理の原則に照して國家の爲に不都合なる教法と言はざるを得ず、蓋し欲を去れば競爭力を弱くすればなり、乃ち純粹なる佛教國の漸く滅亡するを見ても斯の理を知るに足らんか、勿論欲念より悪事と働く者は多しと雖も善事を成就するも亦欲念より起ることにて凡そ人の艱難に耐ゆる所以の者は、欲望と云ふ勢力のあるに因るなり、然るに無常を談し、現世を假の世と説き、明日の知れぬ淺ましいものなることを想起せしめて、進取有爲の氣力を沮喪し寡欲無爲に安んぜしむるを主とするものなれば、今や彌々競爭の劇烈ならんとする世の社會には實に不適當の教法と認むるなり

佛教に就ては種々雜多の説あれども畢竟迷信のみ古來佛教又は方便と云ふ名稱の下

に各宗反對矛盾或は奇怪なる異說を唱て只に世人を迷はせしなり、試に見よ淨土眞宗の坊主等は念佛に非れば在家の俗人か成佛すべき良法あるとなしとて哀れ氣に佛號を唱へ、法華宗の僧侶は念佛宗の者は無間地獄に墮つべしとて我慢氣に題目を唱へて只此法華經に歸依する者のみ成佛することを得と說き、禪宗の僧は曰く無量の法門も百千の經卷も畢竟吾人が本來固有の寶藏を開くの外に用あるとなし只是れ衆生本具の妙心卽ち佛性を見つけることを務むべきのみ心外に法を求むる之を外道と謂ふと敎ゆ、是れ恰も甲は右に行けと云ひ乙は左に行けと云ひ丙は直前に進めと云ふが如く世人を愚弄するに異ならず此他眞言宗の呪符を授け又は囈語に等しき梵語を唱へしむる等種々の僻習あり、而して謂ゆる成佛なることを聞き糺せば孰れも上品なる落し話しと謂て可なるか如きものなれば全く以て世の人々を迷はせるなり故に空想迷信者の外に眞誠なる信者と云ふべき者は殆んど皆無なるか如し、畢竟人智の開明に害あるのみ、

佛書中には哲學上參考すべき說少なからざれども其は敎法以外の問題なり、普通一般の世人には全く不必要のことなるのみ、

儒敎は主として現實なる要務を敎へて徒らに空想を起さしむる樣のことを說かざるか故に世人を迷はせる虞なきの一事は大ひに可なりと雖も惜ひ哉孔子は天命と云ふ妄信ありしか爲に或時は桓魋を一言に挫くか如き勇氣を起すの利なきに非れ共常には「安きに居て命を待つ」と云ふ心を以て事に當るものなるか故に只人力を盡すの外なきことに留意せず徒らに鳳鳥至らず河圖を出さず抔と嘆息する樣の信服し難き事あるのみならず其所說や兎角抑制退守を事とするの氣味あるか故に競爭の劇烈なる世に處すべき開化進取的の活潑なる人物を養成するに不適當なるか如し、殊に子孫の敎養上に至大の得失ある婦女の敎育を度外視する等の缺点あるが故に今日の世には宜しき敎法に非ず、且つ一般國民を敎ゆる方法に於ても只行政の開展に依て直ちに表面より導くの精神なれば、謂はゆる宗敎的の方便に依て裏面より特に女子輩の敎導を務むるの必要ある社會の敎法には全く不適當と認むるなり

耶蘇敎は歐洲古來の俗話なる「天地万物を六日間に造て第七日目に休息せり」と云ふ造物主なる天神を實に在すものと信せしめて深く之に依賴するの情念を起さしむると共に其神

子なりと云へる耶蘇基督こそ誠に吾人の救主なりと一途に頑固なる信念を抱持するものなれば其迷信の爲に國家を忘るゝに至るの虞あるのみならず其妄想なる天神の外は如何樣の尊體にても眞誠に禮拜するとを信者の心裏に堅く自ら禁せしむるか故に遂た我國體民情に戻るものなれば勿論宜しからざる宗敎なりとす、今や西洋諸國に於ても漸々廢滅に歸せんとする趨勢なるが如し、我國には幸ひに未た弘く行はれ居さるとなれば斯の如き弊害ありて格別の長所もなき敎法を今の世に事新らしく吹聽するさへ謂はれなきとと思ふなり、

茲ニ啓蟄ノ爲メ少シク理論ヲ附記センカ、本敎ニ謂ユル天ノ父ナル神ヲ假ニ在リトスルトモ惡病ノ種子播キヲ爲タリ約束ニ背ヒテ洪水ヲ出シタリシテ人間ヲ苦シメル樣ノ不實ナル神ニ對シテ「爾國ヲ臨ラセ給ヘ、我儕ノ日用ノ糧ヲ今日モ與ヘ給ヘ」抔ト祈願スルノハダメナコトヤト思フノデアル、迷信者ハドウイフ心デ祈願スルカヘ知ラヌガ、人間ノ禍福ハ人間ノ能力ダケニアルモノデ、實際病人ガ燒ケ死ナフガ小兒ガ締メ殺サレヨフガ、神ハイツデモ棄テ、置クノデアルカラ余輩ハ斯フ云神樣ニ向テ何モ祈願スル氣ニナラヌノデアル、畢竟人間社會ノ禍福ハ只人間ノ勤惰ニ關ス、神ニ依賴スヘキモノニ非ス、

此他の諸敎法は右三大敎に對して劣ると認むるものなれば尙更尊信するの理由なく亦意見を陳ふるの必要もなかるべし、而して茲に三大敎の利弊を一言に評判すれば、佛敎は度量を寛大にするの利あれ共空想に流るゝの弊あるが如く、儒敎は實務に注意するの利あれ共偏屈に傾むくの弊あるが如く、耶蘇敎は氣力を活潑にするの利あれ共我慢に陷るの弊あるが如し、概言せは各々其所說に善言多しと雖も孰れも敎祖其人に一二の迷信ありたると時勢の甚た懸隔せるとの故に今の世にあッては其敎說の要部に信奉し難きものありて之を奈何ともす可らさるなり、

此故に表面上、儀式的には堅く自己の宗敎を定め居る者と雖も奈何せん人智自然の作用は知らす識らすして自然の理勢に從ひ、オノヅカラ開展する所の完全なる大道に集まり來つて亦知らす識らず皆な悉く同一の方向に進み行くものなることを認むるなり、之を敎法界の大觀とす、而して其大道とは如何なるものぞ、即ち是れ我か謂はゆる人道なるのみ蓋し古來數多の敎法ありと雖も畢竟人道を敎ふるに外ならず其所說に異なるものあるは其境遇の

異なるに因るのみ即ち時と處と位との異なるに從て異なりしなり、其人間社會の幸福を希圖するの精神は亦即ち一なるのみ、此故に深く我が人道教に示す所の教訓を尋ぬれば古來無數の善人智者が言ひ傳へ書き遺したる教訓中の最良至適なるものが自ら集まりて大成するものにして世に名つけて金言と稱する所のものなれば、釋迦も孔子も基督も其他の大賢も畢竟斯の人道教法の一部分を說きたる者に外ならず、此故に人は皆な斯の如く自然に完成する所の人道教法に依て無量の幸福を受くべきものなりとす、

(五) 人道教ノ本領

近來は哲學の流行する故か道德上の話しに就ても幹其なる品行の實事を措て枝葉の論談ばかり(根原論じやと云ふかも知れぬ)が、大府むつかしうなりて、鳥渡しても哲學上の主義はどうじやとか倫理の基礎は何じやとか色々理屈張たる質問が起りますが、我が人道教の精神では哲學者の云ふ如き究屈なる主義抔は取らないのです總て面倒臭い空理論は捨けるのです、そは理論に走する者は實行上に精力を用ひないからです、

元來國民が空想迷信に安んじて居るのは惡い、凡そ人は現在なる此世を極樂淨土にするとを務むるの外はないと云ふ考へから起つたのでありますから無論天竺風の厭世主義ではないが樂天主義の方ではあるが、之を詮し詰てみたら或は直覺的功利主義とでも云ふのかも知れぬですが、然かと思ふと或場合に於ては亦敢て利害損得に頓着せず只之が義じや之が道じやと思ふとを、夫の赤穗の義士の如く自ら勵行するとを大に尙ぶの精神があるのですから斯云精神より論すると或哲學者の謂はゆる無上命令主義とか云ふ方のものに近い樣で何とも判然とした事は云へぬのです、倫理上のことに就ても區區たる理論に關せず唯善事を成さば宜しきなりとの意にて恩人を尊敬すべしと云ひ近親者を親愛すべしと云ふが如きに止まりて餘り堅くるしいとは云はぬのです、斯云譯ですから我が人道教に於ては謂はゆる主義だとか原理だとか云ふ樣の究屈なることに束縛されない者であると思て貰へば宜いのです然りとて何か是れと云ふ據り所がなくてはなるまいと云ふ論も起りますが、無論據り所のないのではない、あるのです人道にはおのづから一貫したる精神があるのですから亦自ら確乎とした據り所があります、とは云ふものゝ謂はゆる主義だとか原理だとか云樣の堅く

るしい思按をする人に聞かせたならば漠として摑まへ所がないと言はれる樣の答へしか出來ないのです、其を云てみれば「全体、人は如何なる大聖人の曰はれた言にしろ其れのみを守て居る者でない、しかのみならず實際は却て其反對者の曰ふた言をも知らず識らず學で行ふて居るともあるもので唯一人や二人の曰ふた言ばかりを守て外の言を聞かないと云ふ樣の量見で暮して行かるべきものではない（此非實は僧侶の所爲を見ても現在知れることである）且つ人は皆な時と場合とに依て其れ相當の活動をせねばならぬものであるから何事に就ても「徒らに一人の說に泥まない樣にするのが第一肝要の心得である、然らされば誠に正しい考への起るものでない」と斯云ふ思案が土臺となりて居るのです、是には尙色々議論もありますが其は姑らく措て つまり何にも片依らない精神を保つて行くと云ふのが斯道の據り所なむです、平たく云ふと何でも善いことを探て行くと云ふ精神なむです、

斯云精神なむですから古來の惡習である狹くるしい宗派的の邪說を擯斥せさるを得ぬのです（今や國家の爲に之を排除するの必要あればなり）、禪、一向、法華等の佛敎家同志が相敵視する其不都合なることは勿論、今異敎徒の所爲に就て一二の所感を陳れば例之は孔子の

敎說に泥で他敎の所說を都て異端扞と云て耳を假さない者だの、或宗敎を擧して居るか爲め外の敎道より出たことは何程善いことでも採用せない扞と意地張て居るのは甚た心得違いのことであると思ふのです、常識ある人に對しては言ふまでもないことながら、試みに彼異敎徒の「ねじけた」心を以て出來ないことを云ふてみれば、佛敎信者であるから耶蘇敎信者の拵へたる物は一切身体に付けぬと云ふことができるか、滊車にも乘らぬ郵便電信をも用いぬと云ふことができるか、亦耶蘇敎信者であるから佛敎信者の作りたる穀菜を喰はぬと云ふことができるか（迷信者は、相互に助け合ふのが人道であると、交際を親密にすれば更に大利益あるの道理を知らぬのである）万一にも斯云ふ量見で居る者があらば馬鹿とか狂人とか云ふの外はありませんが、

品行上のことでも同じ道理で善いことは善として學ふのが當然の務めです、凡そ一般社會の敎へとなりて居る事柄は皆な賢良なる人の思案より出て來たのであるから何敎から出たことでも何人の作つた物でも眞に善いことには實際從て行かねばならぬ樣になつて居るのです、

現在吾々が日々爲て居ることに就て考てみても直にわかることで皆な爲ねばならぬことを爲て居るのですが、實際夫れが何敎から出たのやら、誰に敎へて貰ふたのやら、知らずに爲て居

るとばかりなむです、異竟善と思ふことを爲て行けば其で宜いので、其事が何敎から出たのかを調べる暇もなければ亦爾云ふことを吟味するの必要もないのです、斯云譯ですから我が人道敎の精神は卽ち實際慥に善と認むる以上は誰の說にでも從て行くと云ふのであります、都て善と思ふことには誰の命にでも從ふと云ふのは人心の赤誠で斯くなすのが眞に人たる者の道を行ふ所以であると信ずるのです、古來世に聞ゆる所の道義の辭なる至誠と謂ふ語の意味も卽ち斯云心のことであると信ずるのです、

斯の精神を約言すれば博く學で篤く行ふと云ふ卽ち人道敎の敎則に現れたる博學篤行の四字となるのです、片意地なることを言てる者でもつまり實際は斯の如く爲さるを得ぬのですもの、故に斯の了見を以て斯の道理を實行すると云ふのが卽ち是れ人道敎の本領であります、

（六）宗敎の功德

宗敎と云ふことに就ては色々の異說がありますが殊に我が人道敎を宗敎と謂ふべきものでない抔と云ふ人も往々ありますから其事に關する所見も共に申述ぶる所存でありますが、勿論之を宗敎と云ふのが果して不都合のことならば敢て宗敎と稱ふるの必要はなけれ共、宗敎と云ふ者の本來の精神を尋ねてみると我人道敎こそ今の世の宗敎と謂ふべきものであると思はれるのです、そは他の迷信に因て成立て居る從來の宗敎は我國內に於ては最早宗敎たるの眞價なきものばかりじやと云て宜い程の事實であるから自分等は然思ふのです、現行の敎法を酷評すれば僧侶が其役者で佛敎等の演劇を見せて居るのです卽ち佛敎芝居です、其弊害のことに就ては申述たいことが多いのですが其は又改めて追々開陳することに致します、只今は先づ宗敎と云ふ者は「どういふ事が目的で、どういふ事を爲るもので、亦其信者の心はどういふ樣に働くものであるか」と云ふことに就て少々說明する心得であります、

扨其宗敎の目的は何であるかと云へば「廣く世の人々をして安心の地に居らしめよ」と云ふのが卽ち目的なむです、而して此目的を遂げさせむが爲に善事を成さしめよとするのです、此の善事を成さしめよと云ふことが肝要の職務なむです、

善事を成さしめよとの希望は今や人間普通の心なるか故に勸善のことは宗敎の力を借

るの必要はなかるべし、凡そ善事の爲すべきとなるは小兒と雖も能く知る所なるが而も實際善事と認むる程の事は爲し難きが亦人間普通の常情なれば、そこで宗教と云ふ法力に依て善事を成し得る氣力を附ける必要があるなり（此氣力は惡事を爲さしめざる方に向て更に有力なり）

此故に其善事を成さしむるが爲に色々の方面より人情を捕まへて各宗各々特趣の心得方を敎ゆるのです、即ち善事を成し得る所以の方便を授くるのです、

方便とは信者の心となりて働く所の勢力（觀念）のとなり之に依て憂慨の情感ある者は行る瀨を得て自ら慰むることを得べく、愛憎の情感ある者は自制の力となりて自ら過失を免るゝを得るなり、

其授かりたる方便、之を信念又は信力と謂て或場合にはなか〳〵强き有爲の氣力となるべきもので、世俗に謂ゆる信力鐵を溶かすと云ふやつです、斯の氣力こそ宗敎の精神にして亦其生命と謂ふべきものですから斯の氣力を養成するのが即ち宗敎其者の要務なむです、

凡そ宗敎の貴き所以は斯の氣象を養成して其人を敬愛すべき好人物たらしむるに由て即ち貴いのです、

斯の氣力は「どういふ理由で」起て來るかと尋ねてみると、まあ從來の宗敎（禪宗の如きは論外）に就て云てみれば、往古の人は皆な迷い心（妄信）ありしが故に其迷情ある人に對して謂ゆる神や佛の加護又は懲罰若くは天命等のことを說て之を信せしむるのが發端です、即ち人間外に絕大なる能力ありて吾々を監督する者が見ねぬ所に在ますと思はせて一には之を恐れ一には之を賴みとすべき者であると信せしむるのです、而して既に之を信すると外部より其心に應ずる勢力がある即ち神又は佛抔が何處に居ても已れに力を添て吳れると思ふより其人が意外に强くなるのです、之を平たく云ふと神佛が吾が所爲を見て居ると思ふより其れが精（勢）になりて自づと進て善事を爲す樣になり、亦其れが氣にかゝりて惡事を爲ぬ樣になるのです、

畢竟宗敎信者は冥々中に他力の加勢を得るから忍び難いことを忍び成し難いことを成し得るのであります、例之ば得行かない所へも行き、得言はないとも言ひ、得爲ないとも爲る樣になるのです、そこで他人が見て仲々感心じやと云ふ樣の事も出來るのですから從て世人に

敬愛される樣にもなり（假し善事は成し得ざるも惡事を働かぬと云ふことに於て）亦信用される樣になるのであります、斯云樣なる事情ですから眞誠なる宗教信者は多くは己れの品行に關して他人にも安心を得せしめ自身は固より思想の托する所があるに依て自然安心が出來るのです、

然るに神佛抔と云ふ者がありて人間を守護して吳れるの又は祈願することを叫へて吳るのと云ふ樣のことは今日少し道理を知る者から見ると取るに足らぬ妄說なゆです、故に然云ふことは既に其本家元方である坊主でさへも大概信じて居らぬとなゆですから迷信なる人は、いつまでも徒らにうわべだけの附合信者たることを止て、我人道教の如く道理上より見て誠に信すべき教法に依て冥々中に他力の加勢を得て有爲の氣力を養成するのが處世上に必要のことであると思ふのです、凡そ人は天性として他力の加勢を得る法がなければ誠に安心することの出來ない者ですから其れがないと常々何となく心地さびしいのみならず、ままかの時に意志が折けてしまつて只に不利なるのみでなく亦度外なる苦痛を感するからです、

其他力なる者が活物なると死物なると（例之は神又は衆人若くは銃劍等の物品）に論なくいざと云ふ時には斯ぞよと何か我意想を依せる者あるを要するなり、宗教の功德は畢竟人々の感情を調節して喜怒愛懼等の大なる事業に對して意志を轉倒するに至らしめざる大勢力を其心裡に常住せしむるにあり、是に依て品行の基礎を確定するものとす、謂ゆる安心は（個人の安心、社會の安心共）此中に存するなり、

我人道教は不可思議なる物を信仰せないのですが教法の構成に依て必至當然の道理より自然に冥々中に他力の加勢を得ることと並に安心と云ふ樂趣を得ることが出來るのです、即ち宗教の二大要件（宗教の功德）たる他力の加勢と安心とが得られるのです、蓋し此人道教に斯云ふ法德があるのですから之を宗教と稱ふるのが當然のことであると思ふのです、殊に古來の宗教に代て其實務を執行するものですから應に宗教として施行すべきものであると信ずるのです、

（七）人道に於る他力の加勢と安心の事情

我人道教に於る他力加勢と安心との二要件を申述るに先ちて、豫め人道は當に斯くあるべ

きものである、之が誠に人たる者の道であると云ふことを認て且つ信じて置て貰はねばならぬと思ひますから先づ其理由を申述ることと致します、

扨其人道とは文字の通り人の道と云ふことですが、之が誠に人の道であるならば今更に此人道教と云ふものが興ると否とに關せず必ず人間社會に行はれて居ねばならぬ事と思はれますが、之は實に行はれて居るのです「眞理は發見に先だちて行はる」と云ふ諺の如く凡そ太古の昔より既に業に行はれて居る所の法則なむです、但今日まで其法則を指して實に之が人道であると云ふことを明かに唱道する者がなかつたまでのことなむです、

そこで其人道卽ち法則とは如何なることを云ふのであるかと云へば、人は皆な終身他人の事を爲ねばならぬ者である、誰も日々己れの事を爲て居る樣に思て居りますが實は他の事に盡力して居るのであります、其互に他の事を爲て暮して居る其他の事が己れの業務となつて居るのです、畢竟人は皆な大小社會の一分子なるが故に其社會の一機關となりて當に盡力すべき者であるのです、之を平たく云へば人は皆な我が能くする所を以て互に他を助ける事を務むるのが卽ち人の道であるのです、

斯の道理は社會の彌々開化するに從て益々大切なる心得事となる可きものなり、

此故に人道教は斯精神を以て更に進で共々に樂しく安心して暮して行かれる極樂的の世界を現在なる此世に拵へよと云ふ趣意の教法であります、蓋し人間外に人間を助けて與れるの護て與れるのと云ふ樣なる者は何もないのですから然云者を恃みにする樣の迷ひを起さぬ樣に知識を融通する利便特達の道を開きて人々の妄想を掃ひ除け、吾々は我が身心の力を盡して以て世に立つ者であることを第一に覺悟して、唯同盟者間に互に相助くるの道を彌々完全にせむことを期圖するのであります、而して斯の趣意に基きて撰定したる教則をば守ると云ふことを嚴正なる儀式に由て公然と契約するのです（茲に於て始て人道教の權能を生す）既に誓約する以上は卽ち人道教の信者となりたるのでありますから、そこで人道教の規則が己れのものとなりて自ら一つの責任が出來るのです、

此の己れのものになると云ふことが極て肝要なり、何程の善事良法にても他の事にして見て居れば、楠公は忠義な人じや豐公はえらひ人じや某件は感心なことじや何法は宜い工夫じや抔と其見聞する時に鳥渡思ふばかりで直に忘れてしまふから己れの行

ひに益するとなく畢竟徒らに色々のことを知てると云ふまでの者にて謂ゆる學者の不品行と云ふ樣のことになるのである、人情は誰も同じことで我身のことには兎角得手勝手の理屈が就て來るものなれば、假し命せらるとも賴まれるとも又は勸められて承諾したるにても孰れにても宜しいが決極取て我が事にならざれば少しも力を用ひさる故に善事を成すには其事が責任のある我事である上に尙ほ德と威とある者に監督せらるを最も宜しとす然らざれば恐くは其責任を全ふし難きなり、

其責任が出來ると云ふ意味は、心裏に之を守らねばならぬと思ふのみならず他人に對して治合がありて自然守る氣になると云ふ事情を指して謂ふのであります「はりあい」とは文字で「おさめあふ」と書きますが實に此文字の通りで、己れ獨りでは守りされないとも他人と共にすると守ることが出來て爲すとも成り易いのです殊に多くの人と共にすると更に一層功力があるのです、どういふ譯で然るかと云ふに凡そ他人と共にすることは其人相應に自然有爲の勢力を生するからです、例之は得爲なかつたら笑はれるとか、小言を聞かにやならぬとか、輕蔑されるとか、若くは自然的に絶交されるとか云樣の意味が就て來るからです、

尙此外に我が義心を見せてやろと思ふたり誠意を知られると思ふたり或は名譽になるとか待遇されるとか愛されるとか云樣の色々なる方面より刺戟されることがあるから自然と勇氣が起るのです、人は皆な此治合、勵み合いと云ふことがあるので心が活潑になるのです若し治合がなかつたら人の氣力は消滅してしまふのが是亦自然の情勢であります、故に世の中に人眼ほど勢力のある者はないのです、凡そ惡事も咎むる者がありてこそ惡と云ふ意味が知れるので、善事も亦之を賞むる者がありてこそ其善と云ふ旨味を知るのである、此故に惡事を働く者には人の眼ほど恐しい者はないので、善事を成す者にも亦人の眼ほど賴もしい者はないのである、斯云道理なむですから我人道教に於ては夫の昔し人の迷ひ心より作り出した所の神や佛などは固より信仰することが出來ないのですから其代りに眞に罰を當て福を與れたりする、斯の人心の自然の作用なる大勢力を信仰するのです、殊にまさかの時には親の樣に親切に出來るだけの世話を爲て與れる斯の德義的集合體の能力を信するのであります、其は實に德と力とを備へて居て活動する者ですから道理上より考ても事實上より察しても之を信せざるを得ぬのです、而も之を信するに由て謂ゆる安心を得ることが出

來るのですもの、

元來人の安心の出來ないのは堅く信ずる所の者がないからです即ち信ずる所の者がないに因て疑ひ迷ふに外ならぬのです、其迷ふと云ふ情勢を云てみれば、常に意志の依れる所がないから兎角目下の狀況を見ては思想が之に從て行き、世人の危言を聞ては思想が之に從て行くのです、亦信ずる所のあると云ふ情勢を云てみれば、心の裏に斯くせねばならぬとか爲てはならぬとか強く思はしむる潛勢力の存在するに因て自ら守ると云ふ心となりて働いて居るとなむです、つまり守る所がないと色々のことに情を動かし思ひを引かれて安心が出來ぬのです、我人道教は誓約に由て自己の節操を明確にし又之に依て自ら義務心と云ふ氣力を引起すと共に一方に於ては我力の及ばぬ所を依賴するに足る可き德と力とある活人の集合體より監督を受るのですから常に活潑なる精神を保つて居られるのみならず實際數限りのない多くの同志者と安心して交際し廣く氣脈を通ずるのですから、其世間の廣い泰かな心地を以て推察すると此集合體が無限の趣味と無重の能力とを含で居ることを感じ得るのですが其と共に自然と他力の加勢を得て、いつとなく我が勢力を增て來て容易く（其人相應に）事を成すに至るのです斯云境遇の間に於て亦安心と云ふ樂趣のあることを感覺し得るのであります、即ち之れが我人道教に於て安心の地に居る人なむです、

安心と云ふことは人々の知識と情實とに由て之を得るに難易あれば只一通りの話しのみにては都ての人に悉く會得せしめ難き故に得心せざる人とは尙能く語り合ふの外なけれども試に安心の一例を擧てみれば、兵士が戰場に臨で我が軍隊の强さとを信して居るときは己れも亦强くなるのである、此己れの强さは暗に他力の加勢を得るに因るものとす、謂ゆる安心も亦其信する心の中に存在せるなり、尙劍客が佩刀すれば自から大丈夫なる心地がすると云ふが如きとも同じ心の作用なり、畢竟心に托する所があるより安心が出來るなり、斯云理由なるが故に此教法に無限の智と無上の德と無量の力とあることを洞察する人は暗に恃みと樂しみとになることにて謂ゆる安心も亦其中に含有せることを知る可きなり、

此教法に無量の能力が如何にして出來るかと云へば即ち人は互に助け合ふ可き者で亦實際助け合て居る者であると云ふことを信ずる人が本氣になつて結合すれば自然に生じて來るの

です、彼の憐びべき迷信者輩でさへも其結合力に因て社會に大勢力を得るのですもの何の疑ふとのあるものですか、即ち無數の人智は無限智にして無數善人の集合體は無上德にして何事をも成し得るの力量あるは勿論のことであります、

そこで他を助けよと思ふ人は其助けよと思ふ量見で之に結合すれば斯の大勢力に依て大ひに他を助けるとあるのみならず己れもいつとなく亦助けて貰ふ可きことが必ずあるのであります、

遠き憂慮ありて「まさかの時に」己れ助けて貰ふ趣意の人は其助けて貰ふ積りで之に結合すれば勿論望みの如く助けて貰へるのみでなく其結合の餘力を以て亦他を助けることになるのであります、

唯人氣が斯る良法に向て集合すれば自然一般世人にも其餘德を及ぼして我同盟信者は實に尊き救世主たるべき人となることが苦もなく出來るのです而して安心も此中にあり樂しみも亦此内にあるのです、此道理が判然と得心の行くまで能く考て貰いたいのであります、之が各自の利益なるのみでなく大ひに國家の盛榮を致すべきことであります、

（八）佛教の迷信

佛教は幾多の宗派に分れて禪宗の如く悟道を主とする者もあり又法華宗の如く專ら題目を唱ふる者もあれども世間一般の迷信を一口に言へば南無阿彌陀佛の六字となるべし、然れば此南無阿彌陀佛と云ふことに就て話しすることせむ、そこで南無阿彌陀佛の南無と云ふとはどういふ意味の言かと云ふに之は印度語にて尊敬する意を表する言葉なり、例之は地藏に御と樣とを付て御地藏樣と云ふ所を南無地藏菩薩と云ふに同じことで、あがめる意味の印度語なりと知るべし、

又阿彌陀と云ふも同じく印度語で此語意を漢字にて譯すれば無量壽と云ふ三字となる即ち阿彌陀と云ふことは無量壽と云ふことなり、眞宗信者抔は常時「キメウームリヤウーアユロヨライ――」と唱へて居る其無量壽如來が阿彌陀如來と云ふことで無量壽は即ち阿彌陀と云ふことなり、そこで亦其無量壽とは「アーイフ」かと云ふに其は文字の通りで、量られ無い壽命と云ふことにて平たく云ふと死ぬことのない生命と云ふことなり、

昔時澤菴和尚が臨終の時に「死はせぬどこへも往かずこゝに居るたずねはするなものは云はねぞ」と云ふ辭世を遺して置かれたと云ふことであるが、辭世と謂ふは死で行く時に臨み思ふことを陳て置く遺言の一つであるに其死にがけに死にはせぬと云ふたのだから之には何か、わけがなくてはならぬと思はれるが、其譯と云ふは即ち迷て居る人の眼を覺させる爲に殊更死にがけの置きみやげに歌へて呉れたのである、而して其歌の意味と云ふは、

吾は今から、本の阿彌陀になるまでのことである、決して死ぬのではない、そは此心が假に宿て居たる此軀を去て本出て來た所の阿彌陀と云ふ住家へ歸るのであると云ふことなり、

そこで亦其阿彌陀と云ふ者は何じや其死ない者は何じやと云ふに其れは斯云ふことである、

宇宙間に動植物の生命となるべき一種の勢力が存在せり、此力は始めもなければ終りもない無始無終の者じや、故に生するともなければ滅するともない不生不滅の者である」と、斯云一つの天竺思想なり、

そこで亦之を信する者即ち天地間に阿彌陀と云ふ力が存在すると云ふことを信する者は斯く思ふのである「吾々の心と云ふ者は阿彌陀と謂ふ死ない力が此軀に宿つて働いて居るのであるから吾心が取も直さず阿彌陀である」と因て云へることあり「斯の心不生不滅なり其德を名つけて阿彌陀如來と謂ふ」と斯云ふ譯であるから夫の眞宗信者抔が救ふて貰ふと云て拜で居る所の彼の畫や木像の樣なる者は、實はあるのでは無いのじや、

然らば彼の立ち姿は何を寫したのであるか「どういふ理屈から作り出したのであるか」と云ふに、彼優しき容姿は畢竟世の人々が我慢なる心を無くした所の姿である、即ち無我無心の姿を畫き現したるのである、彼の光明は人間の智慧の德を表はしたるものであるなり

それ斯云ふ譯であるから彼の眠むた相なる顏をして立てる所の阿彌陀佛と云ふ者は取も直さず謎の意味で拵へたる偶像なるか故に新聞紙抔に畫てある「ポンチ畫」と同樣の「はんじもの」なりと知るべし、

眞宗信者が御文章と云ふてるものに、一切の神も佛も衆生を救はんが爲め假に姿を變て現はれ出たる阿彌陀の分身なりと云ふことが書てあるが是れ即ち右に云ふ天竺思想なるものを體裁よく述へたるなり、されば吾々も同じく阿彌陀の分身なるか故に此軀が破損して住で

居られなくなる時は、いやでも應でも亦本の如く其阿彌陀佛に合體するのであるなり、あなかしこ〳〵、

古歌に「雨あられ雪やこほりとへだつれど解れはおなし谷川の水」とあるは卽ち此意を陳たるなり、

阿彌陀の偶像も未開時代の蠻民を善道に引入れる爲め眼に見せる道具としては宜しきものにてありたるならんが今時の人にあつては宛も白晝の提灯に等しき物なるを如何に舊習とは云ふとも、いつまで拜で居るべきとかや、暗路を辿る人々の足下を照らしたりとの故を以て大陽の晃々と出たる日中に尙其提灯を持出して之に附て來いと云ふが如きとそばいつまで守て居るとかや、實に馬鹿にされた話しを守て居るのである、

往昔は上下貴賤に論なく社會一般に迷信の强かりし故に謂ゆる方便と云ふ言葉の下に半分は僧侶の爲に愚弄されたるものにて我國史中にも忌々しく思はれるとの書てあるのが少なくないが、殊に片腹痛く感するとは東寺の坊主が朝廷へ上申して「愚僧は一度死して蘇生したる者なるが其冥府に到りし時に、適々某天皇が閻魔王の面前に引出されて苛責を受て居られしを見てきたり」と云ふとを申出たりとて、其珍事が堂々たる國史に記しあることなり、以て當時一般人智の淺きしかりしを推知するに足れり、今日若し斯る迷夢を宮內省へ上申する迷侶がありたらば如何、狂人ならざれば痴人と認むるの外はあるまいと思はれるなり、豈國史に記し置く可き一大事件とする者あらんや但一場の笑柄なるのみ、

其れ古今時勢の相違すると斯の如く甚しきに尙ほ奈良の大佛の目より血の涙が出たと云て天下の大騒動となりたる樣の未開時代に行はれたる方便虛搆の幼稚教法と守て居て宜きものかや、吁斯る事の爲に空しく財貨と時間と氣力とを費やせる人々の多きを見るに忍びんや、今日の我國人は智力の競爭に大敵と對陣せる前代未開の時節なるとを彼坊主等は知らざる乎、

子守歌　（チンチコブシ）

（前唱）

阿彌陀ほとけと云ふことは、　人の心の別の名で、
こゝろ優しき人は皆な、　斯云ふ姿に見ゆるとの、
謎を畫きし阿彌陀佛、　謎に何をか願ふ可き、
願ふこゝろのあるときは、　なぞになにおかねがふべき、

（後唱）

未開の愚人を導びくに、　自ゞと我慢が折るから、
嘲しの文句を附けて出し、
誚した理屈が例になり、
今でも瞞して飯たべる、
いまでもだましてまゝたべる、

同　（つねのふし）

神や佛に實力があらばー、　ないて暮せる人はない、　ひとはーないー、
ばかにされたよ極樂ようどー、　釋迦に耶蘇の天國に、　てんどーくにー、
あだな願いをさらりとやめてー、　實の爲事に取かゝろ、　とりかーかろー、

（九）經文の珍談

舌切雀の話しは佛敎から出たもので、彼の爺が山へ柴を刈にゆくと云ふのは難行道の話しにして姥が川へ洗濯にゆくと云ふのは易行道の話しなりと聞いたこともあるが、佛敎の經文は其御伽話しの込み入つた樣なるものが多いのである世間には何も知らずに御經を上げて貰へば功德があると思ふてる人が多いから、其人々の迷ひを晴らすの種にもと茲に面白い經文の話しを揭ぐべし

講堂精舍宮殿樓觀皆七寶莊嚴自然化成、（中略）內外左右有諸浴池、黃金池者底白銀沙、水精池者底瑠璃沙、珊瑚池者底琥珀沙、（中略）其池岸上有栴檀樹華葉垂布香氣普薰、天優鉢羅華友鉢摩華拘物頭華分陀利華雜色光茂彌覆水上（中略）若入寶池意欲

令水沒足水卽沒足欲令至膝卽至于腰欲令至腰水卽至腰欲令至頸水卽至頸欲令澄身自

然澄身欲令還復水輙還復調和冷煖自然隨意開神悅體蕩除心垢。

之は無量壽經の極樂の風呂場の段を拔書したのであるが、どういふことが書てあるかは之を讀む學力のある人には直に了解ることであれども、先づ最初の「講堂精舍以下自然化成」との文意は卽ち結構莊大なる御殿が自然に出來ると云ふのであるが、其結構莊大と云ふことも經文を讀まぬ人には判りにくいから更に之を平たく云ふてみれば、御殿の桂柱（其太さ直徑卅間も五十間もあるもの）が金ひくで壁襖などが銀ひくで天井が金剛石で床板が瑪瑙で障子の棧が珊瑚で水精の紙が張てあると云ふ樣の室もあれば、珊瑚の柱に琥珀の壁、金の天井に銀の床と云ふ樣なる室もあり、又は全體が金剛石にて出來た室もあれば黃金ばかりで出來たる室もあり眞白なる銀一色の室もあれば眞赤なる珊瑚一色の室もあり其他七寶で色々に作り替へたる居間や寢間が何千何百と數へる程ありて其室毎に種々美麗の飾り付がしてあるので、假令は金の御簾の垂てある室もあれば金剛石の瓔珞が懸てある室もあり珊瑚の玉簾が釣てある室もあれば琥珀の網が垂てある室もあり、又は金銀の線や瑠璃硨磲琥珀珊瑚抔を糸にして織上げたる錦の戸帳が張てある室もありて、其間毎々々に御光がさすはゞ美麗なる椅子「テーブル」敷物置物を始め吾々が欲いと思ふ程の品物は何から何まで備はらぬものはないと云ふ樣に出來て居るのである、其御殿の廣さと云ふたら凡そ何百何十万里と云ふ程で、高さも何千何百間と云ふ程のものである、斯云廣大にして美麗なる御殿が松蕈抔の生へる樣に自然と、ぬくり、ぬくり、出來ると云ふことなり、而して家の外には金樹もあり銀樹もあり琥珀樹、珊瑚樹、瑠璃樹、金剛石樹等の卽ち七寶の樹木が見事に生へ榮へて居るのであるが其木の高さは何万何千里又は何十何万里と云ふ位いのもので、枝の廣がりも何千何百里又は何万何千里と云ふ位いあるので其最も大きいものは高さが二百万里もあつて廣さが五六十万里もあると云ふのであるが、斯云廣大なる樹木が、幹も枝も葉も花も實も殘らず金ひくで出來てあつて黃色に光て居るのもあれば銀ひくで出來てあつて白く光つて居るのもある、金剛石の木は柴に光り珊瑚の木は赤く光ると云ふ樣に琥珀も瑠璃も瑪瑙も硨磲も各々其色で光つて居ると云ふのであるが、又一本の木にして七寶が色々に雜つて出來て居るのもあるので假令は幹は黃金、枝は白銀、葉は瑪瑙、花は珊

瑚、實は金剛石と云ふ樣に出來て居るのもあれば、幹枝は金むくで葉花實は銀むくのもあり、幹枝は瑪瑙又は瑠璃等で葉花實は珊瑚又は琥珀水精等のものもあり亦枝も葉も花も實も七寶が色々雜で彩色したる樣に出來てるのもあるので其れを言ひ並べたら際限がないから、マア此位いで止めるとして次手に花や葉の大さのことを云て置こーか、勿論花も葉も大小種々あるとなれども其大なるものは一枚の葉の長が三里も五里もあるので、花も亦大きいものは京都の東山から西山へ橋に懸つて被ぶさつたら市中は忽ち暗世になると云ふ樣のものなりと知る可し」然れば若し金剛石の花でも二三輪散て來たならば如何に相場が下落するとも我國は世界第一等の富國となるべし誠にはや有難いことではある、

扨又右經文の內外左右以下なる浴池の狀況を解釋せんが尙ほ平たく云へば風呂場の話しをするのであるが、前に陳へたる御殿の內にも外にも溫泉の浴池ありて其廣さものは何万何千里と云ふ程あつて其狹さものも數百里と云ふ位いである、而して其池も亦金銀水精瑠璃珊瑚抔例の七寶で、金の池の底には銀の砂がありて銀の池の底には金の砂があり、水精の池の底は瑠璃の砂、瑠璃の池の底は水精の砂、珊瑚池の底は琥珀の砂、又は色々の砂が錦を見る如く美しく雜つてあるものありて、其池の水は味が甘くて色々の功德がありと云ふのである」

そこで又經文にある通り此水が入浴者の思ふ如くになるのである、卽ち池に這入てる人が熱くなればよいがと思へば直に熱くなり、冷くなればよいがと思ふと直に冷くなる、增せばよいと思ふと忽ち增し、減ればよいと思ふと忽ち減る、膝まで來ればよいと思ふと膝まで來る、腰までと思ふと腰まで、肩までと思ふと肩まで來る、頭や脊中へ灌げばよいと思ふと空中より出て來て思ふ所へざあ〳〵とでも、せよー〳〵とでも灌ぎかゝると云ふのである、寔にはや不思議なる水であるが、そこで此入浴者が皆な同時に同樣のことを思ふて居れば論も何もないが、五人が五人、十人が十人ながら、いつも同じことを思ふて居るものでない、乃ち一人は肩まで湯があればよいがと思ひ、一人は膝までと思ふ時は其人々の身體に添て浴池の水面に高低が出來るのである、今之を畫にすれば斯云ふことになる、

（浴者）甲の曰く、どうもいやな湯だよ、丁度私をとつつらまへる樣にづつと肩まで來るのもの、

乙の曰く、そーですねー、此地の思ふてることを湯が知なことだよ、

丙の曰く、私も此極樂の湯わ大嫌いですわ、餘り有難過ぎてさ、やはり自分が勝手に深い所へいたり淺い所へきたりする方が心地がいーですねー、

（浴者）甲の曰く、どうもいやな湯だよ、丁度私をとつつらまへる樣にづつと肩まで來るのでするもの、

乙の曰く、そーですねー、此地の思ふてることを湯が知てるなんて、

はんとにいやなことだよ、

丙の曰く、私も此極樂の湯わ大嫌いですわ、餘り有難過ぎてさ、やはり自分が勝手に深い所へいたり淺い所へきたりする方が心地がいーですねー、

熱帶國の「なまけ」人間には斯云談しが氣に入るか知らむが實際斯云とがあつたらどうだろうか此婦人が云ふてる通り却て氣味が悪かろー

扨又此畫に就て特に辨解して置くべきとかある、そは斯云ふ畫にせぬと興味がないから乃ち女人の入浴せる圖にしてあれども、實は極樂國に女人は居らぬのである、と云へば男ばかり住で居る國であるかと早合点をする人もあるだろうが極樂には男も亦一人も居らぬのである、然らば男女の兩方を兼た樣なる人でも居るのかと思ふ人もあるだろうが、此想像も亦當らぬのである、

元來極樂の人間は最初からの成立が丸で違ふから思ふとも爲るとも大變に異つて居る筈でもあるが實に意外のことが多い、第一に飲み喰いをせないで生きて居ると云ふのであるが、そのくせに時々飲みたい喰いたいと思ふものとみえて經文に斯云ふことが書てある、

若欲食時七寶盍器自然在前(中略)隨意而至、百味飲食自然盈滿、雖有此食實無食者

但見色聞香、意以爲食　自然飽足身心柔輭、無所味著、事已化去、時至復現、

此經文の意味を平たく云へば朝飯晝飯晩飯と云ふ時分は勿論、何時にても人々の飲みたい喰いたいと思ふ時には例の金銀珠玉の器物に百味の飲食が盈ち滿ちて出て來るのであるがざつと之を云ひ並べてみると、刺身でも煮付でも蒲燒でも膾でも餅でも菓物でも飯でも汁でも葡萄酒でも「ビール」でも「ミリン」「セウチウ」甘酒辛酒何でも鰍でもないものなしと云ふ樣に揃てあるから如何なる「いやし坊」でも滿足することができるのである、ところが極樂に居る者は實に喰ふのではない、其盛饌を見たり嗅いたりして腹がふくれると云ふのである、何ともはや奇妙きてれつなことではある、之に就て更に面白い話しがある、

五官の作用は自然の道理で、喰いたいと思ふのは喰ふべき必要がありて然思ふのである、元來見たり嗅いたりして滿足する者ならば最初から見たい嗅きたいと思ふべき筈のものでゐる、凡そ見るべきもの、聞くべきもの等それ〳〵區別のあるもので、

若しも旨い物が聞きたい、面白い話しが見たい、美服が喰いたい抔と思ふが如きとありと云はゝ論にも杭にもかゝらぬ話しで、狂人でも斯は間違ふたることを思ふものでない、然るに賢い賢い御釋迦樣が五官の作用が顚倒せる樣なる「へんてこ」な話しをなされたのは、天竺の野蠻人民を導ひく爲に彼等の悦ぶ話しを聞かせよとて、出

たら目な虚を吐かれた故である、なぜ御釋迦様が斯云ふ虚を吐かれたかと云へば、極樂は美婦人も居らず好男子も居らず、をまけに飲み食いもせない國じやと云ふてしまふと、只情慾の爲めに生きて居る野蠻人民は、其では何も樂みがないとて、極樂抔へ往生したくないと思ふとよくないから、そこで極樂の人は大變に美しい、其美しさを譬へて云へば此世の最も美しい人でも極樂の人に出逢ふたら其見苦しいこと天子様の前へ乞食が出た様なものじやと説て美貌を愛する情欲をまぎらかし、旨い物を喰いたいと思ふと直に目の前に出て來ると説て、飲食の欲情をまぎらかそうとしたから斯云ふ不都合なことを云はにやならぬ様になつたのじや」と云ふことを迷信者の口を借て或坊主に問せてみたら、坊主の曰く、人間の淺ましい知慧で佛様のことが知れるものではない、其不思議なる所が卽ち極樂の極樂たる所じや、佛様は決して嘘は言はしやらないから夢にも疑ふてはならぬ、そういふことを云ふて佛法を誹る者が無間地獄へ墮されるのじや」とへらず口を利かした、不道理なることを説て道て之を疑ふ者は地獄へ墮すとは何ともはや邪見な佛様じやないか、

扨又右經文にもある如く極樂の人は飲み喰いをせないから兩便を通ずる必要がないので不潔なる所は何もないのじや二般大根の様にすつぱりしたものである、此故に男も女もある筈がない、故に吾々が女だの男だのと云ふてる所の姿は俤も形ちもないのである、然らば極樂へ生れる子供は誰が產むのじやと云へば、其れは蓮の華が產で呉れるので、而かも手數の掛らぬ様に十歲位いになるまでは華が包で養育して呉れ、捨て置てもあふなくない程の体格になるとそこで華が開て產み出すと云ふ至極便利なことである、

三部經には斯云ふ有難い結構なる話しが書てあるので、尙は面白い話しは澤山あれども同じ様なるものであるが、極樂はなぜ何も歟も七寶で出來てるかと云ふに、元來印度（天竺）は熱帶國で一般人民は赤裸で暮して居るから身体の裝飾には玉を連ねて卽ち珠數にして之を首に懸けたり手に卷いたりするので、玉に作りて美しい物を非常に珍重するから其人情に叶ふ様は極樂に其土地も金銀琥珀水精碼瑙抔である、樹木も金銀琥珀珊瑚硨磲抔である、家屋も衣服も器物も皆な七寶であると、操り回し操り回し、ひつこ過る程に云ひ並べてあるのは、畢竟子供の如き蕃民に能く記憶なさしむる爲に、くどくも説き聞かせた

ものと推察せらるが、何しろ二千何百年と云ふ古昔の蕃民が退屈せない樣に話したとが書てあるのだから、始めに云ふた通り丸で御伽話しのようなものであるがそは三部經のみではない法華經抔も同樣で、みす〳〵子供誑しのような話しが書てあるのだが斯云ものを例の變てこな調子で坊主に讀で貰て何の功德があるか、假し御尤と思ふとが書てあるにしても其れを靑蛙の鳴く樣に唸て貰ふて何の功德がある歟、世には馬鹿らしいとも少なくないが、人を敎ゆる書物を殊更譯のわからぬ樣に讀みて功德があると云ふて居る此習慣程馬鹿らしいとは全世界を尋ねても又とはあるまい、

（十）人道敎實行ノ大法

人道敎を實行するときは人を集めて茲に書てある樣の面倒なる談しを聞かせるのかと思ふ人もあるだろうか、決して然云とではない、勿論必要の場合には理屈張つたる談しも出ようが、大体は古風なる空想的の理屈說法とは大反對で實際的實行的に世人を敎導する場所を設けよと云ふのであるが勉めて便利適當なる方法に依て人情の欲する樣にして敎ゆるのであるからつまり子供にでも老人にでも常に一つの樂みとなる場所を拵へるのである、其旨意は世の人々が悅ひ樂しむと共に賢こい善い人になれる工夫をするのである、元來此敎道に於ては知識の平均を圖る事を務むるのであるから、手取早く物事を知らせる樣に見せられる丈の物を見せ聞かされる丈のことを聞かせて實地經驗的の活知識を得せしむるのであるが人は皆な知らないとは知りたいと思ふもので即ち珍らしいものを見たい、異つたことを聞きたいとの情願は子供の時より老て死に至るの時まで少しも變るとなき人類固有の學問心であるから斯心を滿足せしむる樣にすれば卽ち世間一般の人が快樂中に知識を增すのである、摘て之を云へば面白くて賢こくなれる方法を設くるのである、其れは、どうゆう事をするのかと云へば、勿論色々と工夫はあれども大体の方法は、幻燈、畜音器、顯微鏡望遠鏡、寫眞、繪圖、眞物的摸造品及び理化學器械等のあらゆる文明的利器を集めて敎導し、正確有力なる思慮を喚起誘發するのである、例へば世界の事情を知らしむるには（夜分の敎話なれば）甲の幻燈にて大なる世界圖を映出し置き、乙丙等の幻燈と照し合せて敎ゆるのであるが、則ち他の幻燈を以て海陸島嶼港灣の景色船客乘込上陸の擧動、滊船發着

航海の狀況等を悉く映寫して見せると同時に蓄音器を以て其乘込者上陸者雜沓の音、發着船舶報笛の聲、機關運轉の音荷物運搬の仲仕が拍子を採れる唱歌的美聲に至るまで種々賑はしき音響を聞かしめて實地に在るが如く感せしむるのである、凡そ斯の如くして海外開化國人の莊麗華美なる住宅風俗、野蠻土民の可憐奇異なる居所狀態、寒國の氷山、熱國の叢林、莊大精巧なる工場、勇壯活潑なる漁獵の狀況、及び種々樣々なる鳥獸魚蟲の異相に至るまで目に之を見せると共に其異人が談話、演說、唱歌、議論、等の聲を始め猛獸哮吼の大聲、禽鳥囀鳴の妙音及び可愛ゆき蟲の聲に至るまで蓄音器を以て之を聞かしむるものとす、故に一度教場に入る者は畢竟心廣くなりて貝殼世帶の憂苦を忘るべく、國人の思想全世界に亘りて自然雄大なる志望を起して其結果は、いつとなく國土を擴張するに至るのである、

斯の趣意に基き斯の方法を以て人を教ゆるとなれども人間社會の事業は到底分業に依らねばならぬ故に廣く本教の行はれるに從て漸次分業的に道具を全備するものとす、假令は甲所(甲村)に於ては專ら地理學的知識を授け、乙所(乙村)に於ては專ら植物學的知識を授け、丙所(丙村)に於ては動物學的知識を授け、丁所(丁村)に於ては機械學的知識を授くる等なり、勿論是れは只其大別を云ふに過ぎず、されば實地に於ては動物中でも幾種にも區別して甲村にては專ら獸類のことを說き、乙村にては專ら鳥類のことを說き、丙村にては專ら魚類のことを說き、丁村にては專ら蟲類のことを說くと云ふが如くし、尙ほ牧畜の盛なる地方にては主として此事を說き、養蠶の盛なる地方にては又此事を說く樣にして娛樂中にも成丈必要の知識を得せしむることを務むるのである、斯の如くすれば甲所の人は地理學に精しく、乙所の人は植物學に精しくなるが如く各所其專らとするとに自然精しき人を得るのみならず道具も全備するに至るの利益がある、斯の如くなるときは人々其欲する所に從ひ甲村に往ては獅子の跳るを見、虎の嘯ふくを聞くべく、乙村に往ては駝鳥の駈るを見、千鳥の囀づるを聞くべし、斯くなれば甲村より丙村に往くあり、丁村より乙村に來るあり、利欲を離れたる交際に遠方に友を得て每日曜日の休日には何處に向て往くも娛樂の中に知識を得て如何に樂しきか實に企望の至りである、斯の如くなれば人は樂しみ世は開け國家の富强も自然に高まるのである

斯如くして得る知識は如何に速かにして且如何に有功なるか、今衛生及び一二の事に就て一寸云てみれば、人體内部の諸機關を實物の如く（活人形的に）模造して之を示し、顯微鏡では奇異にして愕くべきもの種々様々の不思議なものを見せてから養生の大法を知らしめ殊に婦人には別に一室を設けて懐妊の當初より出産に至るまでの注意すべき要件を説き（此室に入るには年齢等に制限を設くへきものとす）尚は是れ有力なる國民を造り、健全なる子女を擧げ、直接には我身の幸不幸に關し、間接には子孫及び廣く國家の盛衰に關する最も大切なる事柄であると云ふ理由を知らしむるが如き、暫時の間に無學の婦女にも大知識を授け得るのである、活動幻燈を用ゆれば、植物の種子より芽を出し二葉を開き、漸々展びて枝が出て蕾が上り花が咲き實が出來るまでを見て暫時の間に、未た聞いたともない異草を知るのである、蓄音器を用ゆれば虎の嘯ふひて十町界隈に響くと云ふ恐ろしき聲をば女兒等と共に笑ひなから之を知るのである、斯の如くして知るものは書物抔にて知るとのできぬ實際的活知識なるが故に忘るゝとなく、了知すると速かにして誤解すると甚だ少なきが故に一般世人の爲には、今の學校教育に優りたる功能あるべしとさへ思ふのである

政治家が御祭的の博覽會へ投する費用を半分程も斯云事に投じた方が國益になるだろーと思ふ、余輩は實に斯く信するのである、

各地方に於て前陳の如く實行せらるゝものと假定せば本教會本部の教育事業は天文地理動植物學等のあらゆる諸學科を完備するとは勿論、最も大仕掛にして來會者を滿足せしむる程の設備をなすものとす、今假に京都に本教會本部を開設し右教育的設備を爲すものとして試みに余輩が想像を少し述てみれば、當市の東山には大望遠鏡を二三十基建設して天上の大觀、月界の狀況等を視察せしめ、山麓には直徑四五間もある地球儀の精密に世界を摸造したるものを緩舒に運轉し觀衆に對し指示説明する者を置き、山科鄕には金銀色の大球を以て太陽及び諸惑星を擬し、我太陽系統諸世界の運行する狀況を、東西の兩山間に法則の如く還環して兩方の山嶺上り之を觀覽せしめ、又近傍の室内に於て更に其小規模なるものを示して大法を説明し天体運行の要領を了解して方位吉凶等の妄念を去らしむべき根理を授け、晝間は活人形又は大パノラマ的構造を以て世界各國の人種及び風俗等を示し、夜は活動幻燈を以て之を映寫して見せると共に蓄音器を以て各國の面白き言語を聞かしめ直

ちに其意味を通譯して之を知らしむるのである、是れ唯概略を云ふのみ凡そ斯の如く其設備を完全にして各地方人が一度來觀すれば世界を一周したる者と大差なき程の知識を得せしむるものとす、其他完全なる動植物園の設置は勿論凡そ活知識を與ふべき文明の利器を集め諸科學の精華を具備して遺憾なきに至らんことを勉むるのである、

斯の如き設備をなすは現在及び將來の人情を滿足せしむるのみならず其結果たるや邦國の隆盛を致すべき要務であるから都市の繁榮策としても早く設備すべき事なりと思ふのである、若し他に先んぜらるゝことあらば永久に悔まねばならぬとと思ふ、

前陳の設備を成すを難事と思ふ人もあるだろーが是れ格別むつかしき事に非ず、そは自ら省みて知ることができる、己れの欲する如く一般世人の欲する所であるから、誠實なる二三の名士が起て勸誘することあらば容易に成るべき事なりと思ふのである、一般人心の向ふ所は何事でも成らざることはない、余輩は近き將來に於て實見することを疑がわず、

「附記」　此書冊の讀者中には「これでは神佛の祭禮だの先祖の祭り抔は爲ないのか」との疑ひを起す人があるかも知れぬが決して然云趣意ではない、凡そ吾人が安穩に生活し得るのは畢竟祖先の餘德に因るのであるから、人の道として祖先を尊敬せざるべからず殊に我國の神社は孰れも祖先中の最も有難き御方を奉祀する所であるから其祭典は成丈莊嚴美麗にして賑々しく執行することを義として務むるのである、假し佛と謂ふ名稱であろーが何と云ふ名義であろーが其名稱の如何に關せず、有德の先人を尊敬して其美德を彰わすと共に其美德に肖からんことを務むるのは是れ人の人たる所由の期望情願にして即ち人道教の一大要務とする所である、但憚れにも災難を除き福壽を授け玉へ抔と祈願する如きの邪祭を行はぬのである、されば先祖の祭典抔は特に正當なる儀式の規定ありて實に立派に執行するのである、

人道教要話集　終

明治卅六年二月廿五日印刷
明治卅六年三月六日發行

定價四錢
郵送稅二錢切手ニ限リ郵券代用ヲ諾ス

編輯者　信者　和久井富吉
京都市丸太町川端東入

發行者　信者　井上藤三郎
京都寺町松原北入

印刷者　井下幸三郎
大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地

發賣所　文鴻堂
京都寺町松原北入

明治卅六年二月廿五日印刷
明治卅六年三月　六　日發行

定價四錢　郵送稅二錢切手ニ限リ郵券代用ヲ諾ス

編輯者　信者　和久井富吉　京都市丸太町川端東入

發行者　信者　井上藤三郎　京都寺町松原北入

印刷者　井下幸三郎　大阪市西區末吉橋通四丁目十六番地

發賣所　文鴻堂　京都寺町松原北入

本書ハ斯ク思フノデアル、今此要話集ヲ讀デ、其人ガ他ニ者迷信又ハ利欲ノ關スル私心ナキ以上ハ決シテ反對ノ意見ヲ起サルヽハナカルベシ、余輩ハ今日世上ノ事ヲ見ルニ付、聞クニ付、我ガ人道教ノ廣ク實行セラレンヿヲ望ムヽノ情彌々切ナリ、請フ眞實同感ノ諸君ハ左ニ添付セル用紙ニ住所氏名及ヒ年齡ヲ記入シテ本書發行者ノ許マデ寄送アランヿヲ、其ハ他日弘行ノ際ニ臨テ同感諸君ト廣ク氣脈ヲ通スルノ便ニ供セント欲スルナリ、

人道教實行企望者　府縣　市郡　町村字　年　月生

人道教實行企望者　府縣　市郡　町村字　年　月生

人道教實行企望者　府縣　市郡　町村字　年　月生

府縣　市郡　町村字

人道教實行企望者　年　月生

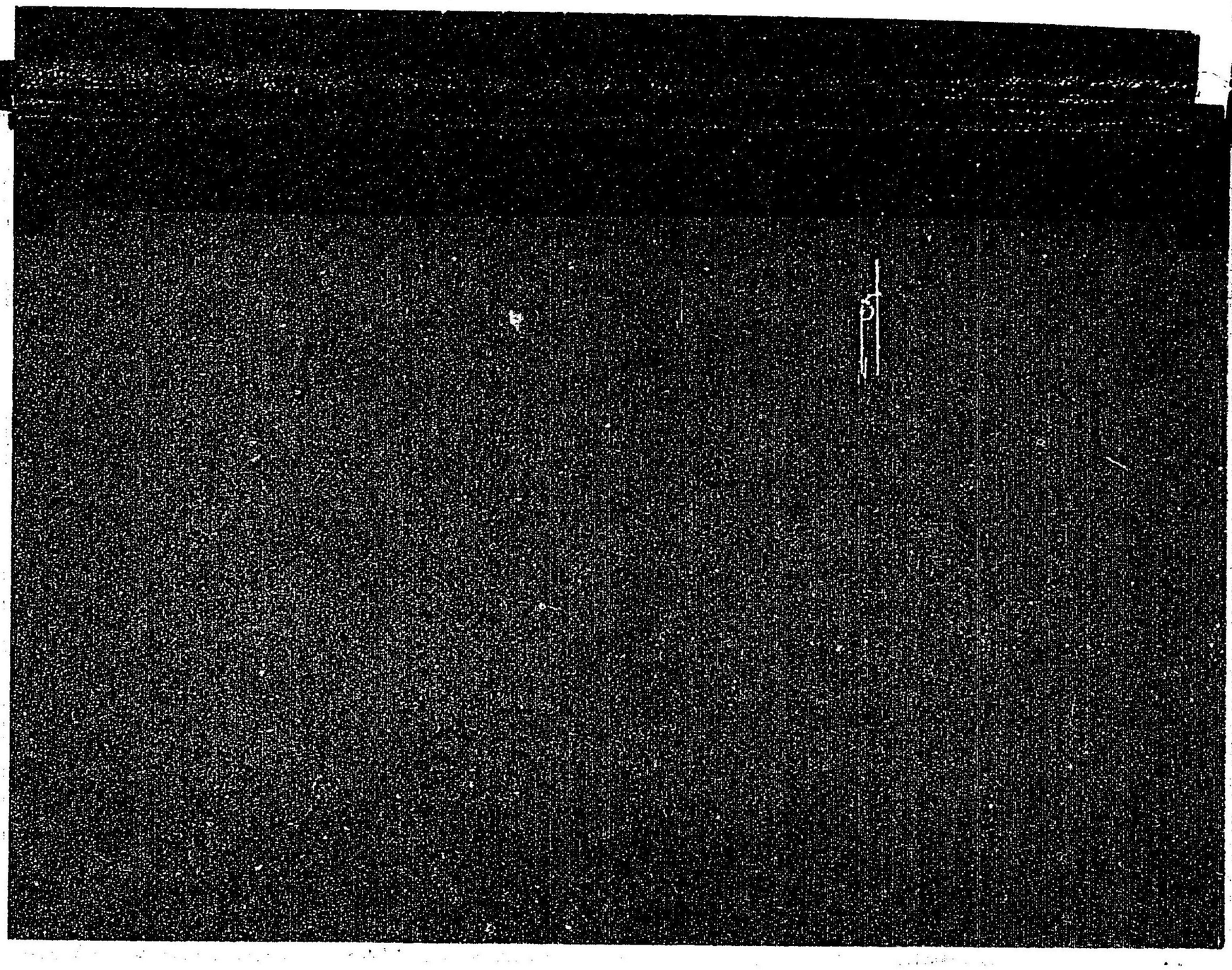
府縣　市郡　町村字

人道教實行企望者　年　月生

府縣　市郡　町村字

人道教實行企望者　年　月生

A



人道教要話集

和久井富吉

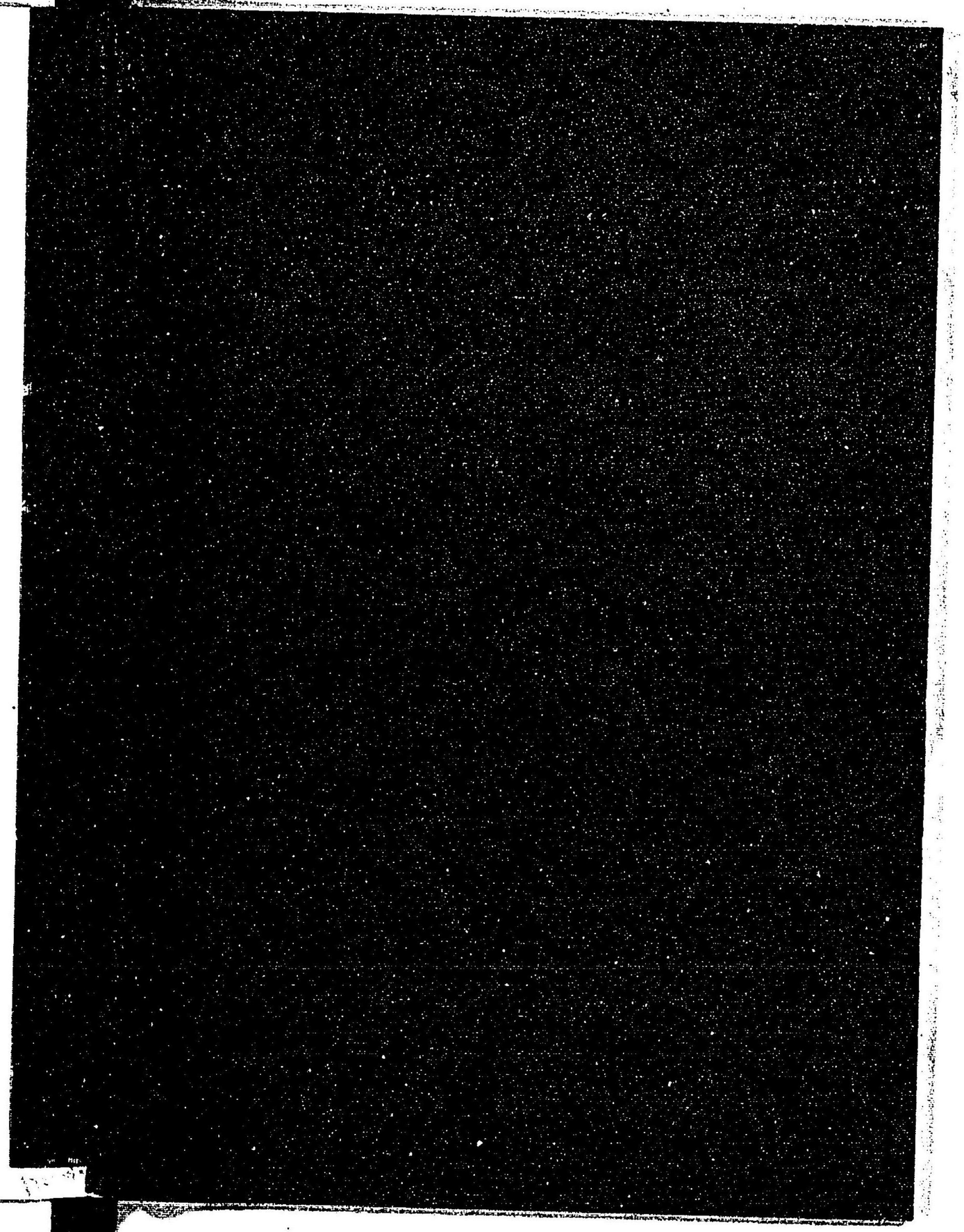
国立国会図書館

013678-000-4

特49-56

人道教要話集

和久井　富吉／編

M36

ABA-0149